

# 長期連載論文 第6回

## 文明の輪廻転生

—アトランティス異聞—

### 第五章 アトランティスの地球術

会長 渡辺豊和

#### 風水術と夢通信ネット

#### ワーク

「山龍図」と題する風水地理観を明快に図化したものがある。折り重なる山脈の中で一きわ高く目立つた山脈の屋根を背とし平野を囲む様に張り出した二筋の山の突端部を両手とし更にそれより後方に張り出した山の突端を足として平野の真中に頭部がある龍。この頭部こそ風水上最適の場所、明堂である。この図で明瞭に示す風水地理学は山脈と平野更に河川等の自然地形を龍と見立て、龍が生々と活動出来る姿勢になっている地形に都や墓廟を造営するための極めて功利的な空間象徴学である。簡単に言えばこうである。都市や墓廟を造営する風水上の適地は三方がUの字馬蹄形の山に囲まれ南だけが開いている盆地で、更に盆地内部では川が東と西に南北に貫流

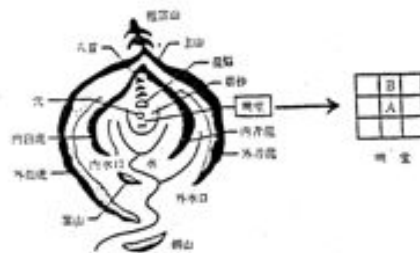
し南で合流する平野である。しかも馬蹄形山脈の南には小高い独立の丘があることである。この丘を朝山と言う。盆地を囲む山も一重ではなく幾重にも馬蹄形に同心円状になっているのが望ましいから図を見ると女陰にそっくりである(図5-1)。

盆地を囲む山脈の屋根を龍脈、盆地の真中の都市や墓廟を作るに最適の地を龍穴と言う。この龍穴に造る都市や墓廟を明堂と呼んでいる。龍脈は陰唇、龍穴が陰であるのは説明を要さないであろう。龍脈は地の気(エネルギー)を運ぶ道でありそれは風(空の気)をも運び、河川は水(の気)を運ぶ。龍は中国の空想の動物であり、蛇を理想化したものである。蛇は水神であるから龍は当然水神でもあるが天空を翔けもするから雷神と同じ天空神でもある。いずれにしても天地と水のエネルギーを象徴している。古代中国人は象徴の達人であった。自然地形を理想の動物に見立てるなど他の古代文明に



「山龍図」風水ブームは内通した自然観の象徴でもある。  
 (Potschek 氏 訳「風水—中国の古代芸術」明文書房より)

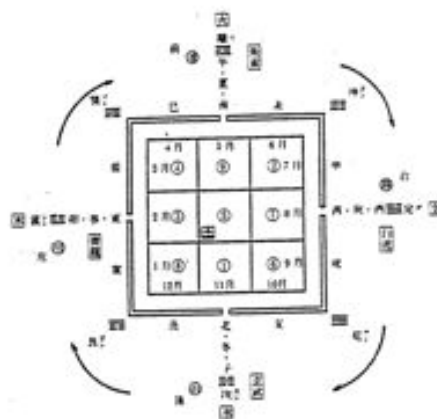
風水術の山龍図



▲理想的風水地形  
 理想的風水地形と明堂。Aにほじめては宮城があった。次第  
 次第に、宮城をさらに置くようになった。

風水通地モデル

(図5-1) 風水術の山龍図  
 風水通地モデル  
 明堂モデル



は見られない特徴である。ここで、中国の風水術の地理観念、夢通信の光のネットワーク、正一二及び二〇面体による地球結晶の三つの手立を知った。このことは相互に緊密に関連し合う古代科学の有り様を明確に示している。中国古代からの医学、漢方医学では経絡とつぼのことがよく知られているが経絡は解剖学的には目に見えない。神経ならばつきり神経筋として目に見えている。あるつぼを押さえるとまるで違う身体の場所の患部が治る。これはつぼと患部を結ぶ経絡があるからである。西洋医学では患部を神経と脳とが繋っていて神経は脳からの指令を伝える通信線とされ患部そのものを切開したりして治さない限り病気は治癒しない。極めて解剖学的、即物的である。東西の医学が合体してはじめて眞の医学が成立しているに違いない。と言うよりも他の生物同様宇宙の創成物である人間の身体は目には見えない経絡と目に見える神経を通信ネットワーク

クとして調和を保っていると言うことであろう。地球も本来は生命体である。人間の身体と即応しているはずである。地球結晶の稜線は骨格であり、夢通信のネットワークは目にはつきり見えないから経絡、龍脈は目に見える自然地形であるから神経、龍穴は耳や鼻、眼等の感官、夢通信の交点はつぼ、地球結晶の頂点は関節なのではあるまいか。古代の人々はそのことを熟知していたに違いない。

### 風水術と陰陽五行説

風水術の地理の観想は必しも地形にのみあるのではない。「山龍図」や「風水地形図」を見てもわかるが風水術は自然地形を龍や女陰に見立て天地のエネルギーや土地の多産即ち豊饒を象徴する地理

学である。しかし後世になって方向が重視されてくる。その方向は東西南北三六〇度を二四等分しているから随分細分化されている。

二四等分の方向の意味を詳しく述べても仕様がなしいし第一自身そんな詳しいことは知らない。基本は東西南北とその対角の八方向が重要である。二四方向となったのは「ね、うし、とら、う」の一二支を加えたため最小公倍数の二四を必要としたことにある。従って重要なのは八方向、特に東西南北の四方向である。北は冬・玄武、東は春・青龍、南は夏・朱雀、西は秋・白虎を表わす。これに易の陰陽が加わる。陽は□、陰は○であるのは周知のことであろう。この陰陽が合わさって□は太陽で日、熱を表わし夏であるから南、○は太陰で月や冷気を表わすから冬で北。□は少陽で星・日光等を表わし春と東、○は少陰で遊星・夜等を表わし秋と西である。但し「易」の八掛はこれに更に陰陽を加えて出来、八掛によって八方向

を示している。

自然物は火水木金土の五原素の組合せによって出来ていると言うのが中国の自然観であるがその五原素を五行と言う。それで五行の相互関係は木は土に勝ち、土は水に勝ち、水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に勝ちと言うジャンケンに似たことになっている。更に木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生ずると言う様に無限循環をなしている。但し五行も陰陽によって生ずるから原素も宇宙の「気」から生じる。誠に壮大な宇宙、自然観である。

又火は陽で熱、水は陰で冷、木は温暖、金は円を、土は柔を表わしている。従って火は夏、南。水は冬、北。木は春、東。金は秋、西を表徴している。土は明確な方向を示さない。東西南北の四方向ですら陰陽、五行で示されるから陰陽が重なる八掛、五行の適当な配列によって二四方向が意味づけられる。この陰陽五行による方向の

意味づけは夢通信ネットワークから本来は来ているに違いない。春夏秋冬は大太陽と地球の位置によって決る自然の摂理であるから当然であろう。夢通信ネットワークは冬至、夏至の日の出、日没方向、東南、西南、東北、西北を指す菱形で出来上っており、更に春分と

秋分の日の出、日没の東、西とそれに直交する南北の四方向は菱形の対角線の方向を示しているから重要な方向であるのは断るまでもあるまい。要するに夢通信ネットワークにあっても八方向が重要であり各方向ともにそれぞれ四季の意味を担っているのであるから風水術の方向意識と全く同じであると言っている。古代中国では地形による地理観に更に夢通信の方向の意味づけが加えられていたのに何時の日にか方向の意味づけは忘れられて行ったのであろう。ある空白の時代を経て方向の意味が再認識された時には夢通信の素朴な方向ではなく複雑な体系としてその意味が再構築されたに違いない。

## 中国の神話と科学

中国神話で最初の第一等の神は伏羲であり次が女媧と言うことになつてはいるが実は二人は夫婦であり夫婦で天地を作ったと言うのである（ともいわれるが正確にはそうではない。第一章）。しかも伏羲が定規、女媧はコンパスを持つて天地が今あるとおりに設計した。古代から大運河を開削したほどの中国文明のことであるから治水に異常な関心を示して来た。その象徴が伏羲と女媧の夫婦である。中国は功利的な文明である、神までが極めて実在の人間に近い。但し天地を設計したと言うのは壮大である。有名な司馬遷の『史記』では伏羲は八掛を作ったとある。八掛即ち易である。易は人間の運

命を示す書であるが八掛と八掛が重つて計六四掛を説明したのが易經である。精神分析学者ユングが易を立て一度も運命が的中しなかったことはなかったと言う。彼は余りにも凄じい中率に驚き易の研究をしたがそのからくりはわからなかった。いずれにしても百發百中であるからユングはこれと共に現象シンクロニティに違いないと考へた。ユングは師であるフロイトとははじめから何処かそりが合わなかった。フロイトは夢分析を精神病者の治療に応用した最初の人であり、夢分析に打ち込んでいたユングはそれ程年長でもないフロイトに師事したのであるから尊敬していたのは確かである。それでもフロイトはユングに比べて遙かに唯物論者であつた。彼は人々の心の中に眠っている種々様々な欲求は全て性に關係すると思つた。幼児が母親の乳首を嘔むのも幼児の性欲即ちリビドーであり夢の分析も全て性欲に關連させて解いた。夢は性の欲求が満され

ないから見るのであり夢の内容を分析すれば患者がどんな性的な抑圧を受けているかわかり、その抑圧の原因を取り除いてしまえば病いは治ると考へ実行した。しかしユングはフロイトの余りに割り切り過ぎる性欲説には次第に疑問に思ひ最後は訣別する。その訣別も近づいたある日のことであつた。夢には性欲だけでは解けないものと深い意味があると自論を語りはじめるとフロイトは不機嫌になつた。そこで音を發する何の手立もない静かな部屋の中で突然物が炸裂する音を出した。ユングが「念」によつて出したのである。フロイトに人はその氣になればこんなことも出来るのですよと言つた。フロイトは更に不機嫌になつたがユングの神秘的な行為を目のあたりにしたから認めざるを得なかつた。ユングの行為こそ共時現象と呼ぶものであり宇宙と人間が呼応する時に起る現象である。易の陰陽六四掛は六つの陰陽の組合せ総數である。一つ一つの陰陽を出して行

くのは自分の運命を知ろうとする人自身である。一つ一つの陰陽を出しながら宇宙と交信していることになる。いずれにしても古代中国にあつては六四掛の一つ一つ意味を読み取つた科学システムがあつたのである。要するに陰陽六つの重なり具合が様々な宇宙からの通信内容を示している。この宇宙からの通信を個人として受信した場合は夢となる。従つて古代中国には夢から宇宙の意志を読み取る科学大系が出来上つていたのである。

## 脳・神経

繰り返して述べて来たが中国医学ではどう言うわけか脳や神経に対して特別の配慮を払わない。解剖学的知識がなかつたとは思えない。

漢民族の元祖は遊牧騎馬民族であつたことは確かであつて、遊牧騎馬民族は動物を屠殺し解体することを日常としていたから解剖の知識は豊富に持ち合わせていたと思へる。漢民族は遊牧騎馬の習慣を止めて農耕民になつて後に医学の体系を完成したとしてもすでに遊牧騎馬民族の先祖の時代から後の漢方(中国)医学の基礎的なことは確立していたであろう。むしろ山野を駆け巡り体力の損耗のほげしい遊牧騎馬民族の方が一つ所に定着して安定した生活を送る農耕民族より病気には敏感なのではないか。

豊富な解剖学知識を持つていたと思へる漢民族、即ち中国の人々が脳や神経を無視して経絡、経穴を重視したのは病氣はその氣の流れがスムーズでなくなつていくと考へたからであろう。漢方(中国)医学では経絡、経穴は脳、神経に連繫していることは認めていた。唯脳や神経の疾患も氣の流れの調整によつて治すことができると思

えていた。大地（地球）にとって  
は神経が龍脈であり龍穴は神経の  
交点である。又脳に当るのは磁気  
を発する北極であるだろう。但し  
中国人は気の発する元の場所を崑  
崙山としたことは前に述べたがこ  
れは中国国土を世界の中心と考  
える彼等の通弊であつて要するに地  
球にとつての「氣」とは何かと理  
解すれば真の答は簡単に得られる。  
地球の「氣」はまずは誰が考  
えても磁気のことであろう。もし磁  
気に乱れが生じたら地球内の色々  
な事象、たとえば気候などが大き  
く変化するに違いない。日本の縄  
文時代には三輪山や三上山を整然  
とした紡錘状に整形しピラミッド  
型の山容を得た。これは何も日本  
だけに限られたことではなかつた。  
トルコの中部地方には明かに山頂  
にピラミッドを造つた高山すらあ  
る。これも日本で山頂や山容を整  
形した縄文時代と同時代であろう。  
この山容の整形は山の尾根である  
龍脈の整備であるから神経系の調  
整である。この調整の効果はどん

なものか。人体では五感の障害を  
治療することに当るのではあるま  
いか。

## 感覚器官と五臓六腑

それでは大地（地球）にとつて  
の五感とは何なのか。縄文時代に  
当るBC三〇〇〇年や四〇〇〇年  
の古代人が現代と同じ科学的分析  
をしていたはずはない。と言うよ  
りも彼等が継承したアトランティ  
ス科学は現代とは違い分析的な方  
法を主とするものではなくよく似  
た事象を比較してその事象同志を  
相互に見立て、その見立てを精密  
に仕立てる方法を主としていた。  
中世の北欧の人々が人の骨を岩に  
見立てたのもそうである。古代人  
が五感を地球上の何に見立ててい  
たかは今ではよくわからない。し

かし似た事象を拾い出して組合せ  
るなら人体の色々な部分も割合簡  
単に地球の部分に見立てることは  
できるであろう。要するに古代中  
国人やインド人、中世の北欧人、  
近代のアメリカインディアンにな  
つたつもりで見立てをすることで  
ある。

勿論中世の北欧人や近代のアメ  
リカインディアンは古代科学を継  
承しているの言うまでもない。  
近代アメリカインディアンは地上  
に石を環状に並べ境界を作りその  
中に入ると病が治ると信じていた  
し事実治りもした。この石の輪を  
メデシンホイール即ち医療の輪と  
言うが彼等は大地（地球）と人間  
の生命は直結していると考えてい  
た。従つて単なる人体の見立てと  
して大地（地球）を考えていたわ  
けではない。もつと切実なもの  
として大地を見ている。

感覚器官は人体表面、即ち皮膚  
の特異点となつていてそれは視覚  
の眼、聴覚の耳、嗅覚の鼻、味覚  
の口（舌）であり触覚のみが皮膚

の全面にほぼ均等に配置されてい  
る。地球の表面は陸と海であるか  
ら地球の感官

は陸海の特異点であると考えてい  
い。結論から言うところである。  
視覚即ち目は山岳、丘陵。聴覚即  
ち耳は砂漠。嗅覚即ち鼻は森。触  
覚は草原。味覚即ち口（舌）は湖  
沼である。理由は次の通りである。

山岳、丘陵特に高い山は眺望点と  
して活用されるから眼に当る。砂  
漠はたとえ日中であつても物音の  
全くしない静寂そのものであり音  
を聴き分けるには最も適している。  
又乾燥の極致でもあるから感官と  
して最も乾燥度の高い耳である。

森は湿潤であり感官としては口に  
次いで湿潤である鼻がそれにふさ  
わしい。湖沼は水そのものである  
から当然口（舌）である。こうし  
て古代人が地球上の地勢的な特徴  
を感官に見立てていたとしたらサ  
ハラ砂漠の中のエジプトのピラミ  
ッド、ジャングルの中のメキシ  
コ・マヤのピラミッドがどんな役  
割を担わされて建造されたのか想

像でできる。

感官に関しては納得出来ないむきもあるう。しかしこの事についてはエジプト三〇〇〇年の文化が保証してくれる。エジプトは視覚を重んじた見立ての文化であった。『死者の書』として有名な「アニのパピルス」などをみるとよくわかる。これは後述するがBC五〇〇〇年からBC四〇〇〇年に成立したというのとBC一五〇〇年からBC一四〇〇年の間に制作されたとする二説があつてよくわからない。いずれにしてもこれは古代エジプトの『霊界物語』である。霊界の様子を克明に絵と文字で書き綴った今流にいうなら「大人の絵本(但しエロではない)」である。ところが挿絵はいいとしても文字までも絵でありこの文字は「聖文字」ヒエログリフなのだがエジプトの文字は鳥や動物などを描く象形文字なのに実は鳥や動物が文字の意味ではない。雀の絵文字ならそれは「す」鳩なら「は」という音を表わす。だからまるでしりと

り、音の連鎖として絵文字の文章は出来ている。「すずめ」二羽「めだか」「かも」「もず」各一匹一羽…といった具合に読む人には目に映り音としては「すすめかも」と読める。音が具体的な事物の絵で表わされるのであるからエジプトでは砂漠が耳、森が鼻、湖沼が口といった見立ても極当たり前に出来たであろう。そのエジプトはそっくりそのままアトランティス文明を引継いだと考えられる。アトランティスの感官見立ての地形認識も充分ありえたはずである。

漢方医学では「五臓六腑」と言えば内臓全てのことであるが五臓は肺、心臓、脾臓、腎臓、肝臓であり六腑は大腸、小腸、胃、胆、三焦、膀胱である。経絡と経穴はこの五臓・六腑と繋つていて五臓六腑の疾患にはこれに繋る経穴に針灸で刺激すれば治る。五臓六腑に心包を加えたものに機能する一二の経絡を「一二経絡」と言い体の表面、即ち皮膚に触つてみて内臓の具合を知ることができる。漢

方医はこうして内臓の病いを診断する。漢方も西洋医学も両方できる女医さんから聞いたところでは漢方医術に慣れて来るとこの触診で殆どの内臓の疾患はわかるのである。西洋医学でもある程度はできるがやはり漢方医術ほど正確ではないとのことである。六腑のうち三焦は西洋医学の解剖学的にはない器官であり心包と言うものも同様な。漢方医学は目には見えない経絡や経穴を頼りに治療するから内臓でも目に見えない。どちらかと言うと想像上のものが幅をきかせていたりする。更にもう少し漢方医学の知識を紹介すると次のとおりになる。

体の背中側が表(かつ陽)で腹側が裏(かつ陰)であり表を走る経絡が六腑に関わり裏が五臓に関わっている。但し五臓は胸部(上半身)にあり六腑は腹部(下半身)にある(図5-2)。

さて地球にとって内臓は何に当るのか。地球の内部は中心の核から同心円(球)状に幾重にも層を

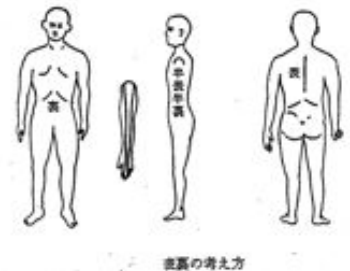


図5-2 十二経路と部位、表裏、陰陽、五行の関係

部位	表(背側)=陽	裏(腹側)=陰	五行
手の側	大腸経 (陽明)	肺経 (太陰)	金性
⑤ 中央部	三焦経 (少陽)	心包経 (厥陰)	火(相)性
小指側	小腸経 (太陽)	心経 (少陰)	火(本)性
足の側	胃経 (陽明)	脾経 (太陰)	土性
⑥ 内側	胆経 (少陽)	肝経 (厥陰)	木性
⑦ 外側	膀胱経 (太陽)	腎経 (少陰)	水性

なしていて大雑把に言っても中心から内核、外核、マントル、地殻



となつてゐる。丁度りんごや柿に似ているわけであり内核は種、外核は心、マントルは実、地殻は皮である。視覚的な相似の事象に心を寄せる古代人が地球の内部にどれだけの興味をもっていたかはわからない。多分殆ど知識はなかつたのではないか。火山が噴火し溶岩が流れ出すから地球の内部に高熱のドロドロした液状のものがあつたのでは想像してゐたではあるがそれ以上の知識はなかつたであろう。従つて地球の表面を内臓に見立ててゐた可能性が高い。漢方医学でも背中側と腹側を走る経絡が内臓に直結してゐるのに似て地球表面の部分、部分が内臓に繋がつてゐると考えたであろう。そこで一二経絡は地球に内接する正二面体と関係してゐると見るのが妥当ではないかと考える。地球上の一二の正五角形の各々が五臓六腑に対応するとしてみる。これならば漢方医学に近い地球の人体見立てである。

## 風水から見たアトラン

### ティースと世界図式

古代中国は易や風水術、更には漢方医学といった独自の科学を創り出して来た。特に漢方医学の針麻酔などヨーロッパやアメリカの近代医学者を驚愕させた。麻酔薬を一切使わずに必要なつぼに針を打つだけで完全麻酔ができてしまふ。まさに魔術といつていい。手術をせずにガンを直してみたり近代医学では不可能なことを漢方医はいとも簡単にやつてのける。漢方医学は古代から伝る術であつて主として針灸で治療する方法である。これから幾度も重複するであろうが針灸はつぼに打ちつぼと内臓なりの患部が経絡で繋がつてゐる

ことは周知のことであろう。但しつぼも経絡も解剖して目に見えるものではない。いずれにしても漢方医術は魔術にも近く不思議な技術であるが私にはこの医術も含め中国の古代科学はアトランティスから伝えられてゐるように思えてならない。漢民族は古代エジプト人やインダス人とは違い旧型モンゴロイドではない。新型モンゴロイドであるがどう見ても新旧どちらのモンゴロイドにも属さないと考えるメソポタミア人の文化文明に中国はよく似てゐるから人種の違いによつてアトランティス遺民かどうかは一概に決められない。風水術も中国特有の地理観を示しているが、およそ漢方医学と共通している。というのも大地を人体に見立ててゐるからである。

京都、平安京は風水術上これほど理想的な地形に恵れた場所はないといわれている。理想の地形とは北と東西に山脈が囲み南だけが細く開かれ、その開かれた先きに独立丘がある。又川が左右二筋南北に流れ南で合流する。その向うに独立丘があるというわけである。北、東西を囲む山脈も一本ではなく同心円形に幾筋か重なつてゐると更にいい。まさに東西二筋南北に川の流れる盆地こそ理想地形であるが盆地の中心が龍穴、で人体のつぼにあたり山脈は龍脈といふ経絡に当るとされている。京都では北山、西山、東山が龍脈、東西二筋の川は鴨川と桂川、南で合流して淀川となりその向うの山は岩清水八幡宮のある男山である。これを朝山といふ。

もしアトランティスの人々が風水術を知つていたら地球全体に当てはめて考へてゐたであろう。古代中国人もあの広大な中国全土を一つの風水地形とみなしてゐたのであるから全世界を統治したアトランティスの王が地球全体をそう見ないはずはあるまい。それではそれはどんな地球観であつたのか。それを知るには世界地図を極端なまで図式化するに限る(図5-3)。

中心即ち明堂(龍穴)はアトラ

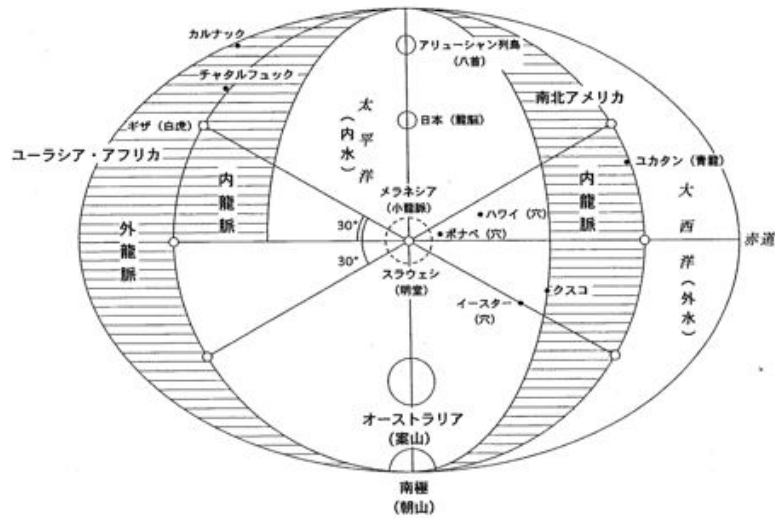


図5-3 地球風水図

ンティスのスラウエシであるのは  
いうまでもない。西のユーラシア、  
アフリカ、東の南北アメリカは龍  
脈、北のアリウシャン列島で結  
ばれるカムチャツカ、アラスカは

極端に図式化してみるとよくわか  
るであろう。更には周囲をファイリ  
ピン群島、ボルネオ、スマトラ、  
ニューギニア等のメラネシアの巨  
大島で形成する小龍脈で囲まれて

八首（風水図  
参照）である。  
詳細の説明は  
省略するが  
「地球風水  
図」を見ても  
らえばおよそ  
のことはわか  
るはずである。  
太平洋、即  
ち水に囲まれ  
たスラウエシ、  
アトランティ  
スは大きくは  
ユーラシア、  
アフリカと南  
北アメリカの  
龍脈に包まれ  
る極めて安定  
した位置にあ  
ることがこう

いるから安定度は抜群である。ア  
トランティス島はスラウエシであ  
ったにしてもインドネシア、メラ  
ネシア全体がアトランティス文明  
圏であったはずである。同心円で  
構成されているアトランティス市  
もスラウエシのこんな地理環境を  
巧みに図式化しているのかもしれ  
ない（図5-4）。日本はこれでは  
龍腦にあたり神経の中核にあつて  
情報をコントロールしていたこと  
になる。日本に稠密な夢通信網が  
列島全体に張り巡らされているの  
はそのせいなのか。「地球風水術」  
ではマヤのあつたユカタン半島は  
青龍、ギザは白虎である。古代中  
国では政庁の中心を王宮とし敷地  
の外周を高い城壁で囲み東西南北  
に門を設けた。北が玄武門、東が  
青龍門、西が白虎門、南が朱雀門  
である。この場合に高い扉が龍脈  
であり四神が門で表現された。青  
龍は水、白虎は風を象徴するから  
風水では青龍と白虎が玄武と朱雀  
よりも重視された。四周を取り巻  
く山脈の中で青龍と白虎に当る山

が一頭地を抜いていることがいい  
地形だった。東に龍頭山と西に虎  
頭山があるのがよかったが、もし  
ない場合は高い塔を建てた。地球  
風水図ではユカタンが青龍、ギザ  
が白虎であるがこの地にピラミッ  
ドが多数建造されたのは地球風水  
の重要点、アトランティスを守護  
する重要点であつたからなのか。  
特に白虎に当るギザに壮大なピラ  
ミッドが建造されたのは白虎が風  
神として天に対応しているからか  
もしれない。龍は水神で地を守護  
する。地球規模の風水であるから  
アトランティスを守護するのは地  
上の国同志の闘いのためではない。  
天空からの攻撃であるのはいうま  
でもない。異ち天変（地異も含む）  
からの守護である。ギザのピラミ  
ッドはBC二七〇〇年頃の建造で  
あつてアトランティス時代のもの  
ではない。しかしアトランティス  
時代にこれに似たものがこの地に  
なかつたとはいきれない。むしろ  
古王国時代の王がアトランティ  
スをしので建造したともいえる。



ギザよりも遙かに遅いマヤのピラミッド群にも同じことがいえるかもしれない。ギザの北に世界最古の都市チャタルフユックが来るがこれは白虎の背骨とでもいえないであろう。逆にインカ帝国の首都クスコは青龍の腹か。こうして風水図として地球を見るとマヤ、インカ、エジプト、トルコ等の地理的意味が極めてイマジネイティブに把握することができる。アトランティス時代はまさにそんな地球観の時代だったはずである。ギザを通る東経三一度〇八分はトルコの西部を通り国土を二分するがチャタルフユックはこの経度よりわずか東である。地球風水図上はこの東経三一度〇八分は白虎の背骨とわけていい。トルコにはネムルト山の標高二〇〇〇メートルを越す山頂を整形した凄絶なピラミッドもあるがエジプトとは違い多くはない。白虎の背骨にふさわしい。その代りチャタルフユックなど早くから都市ができ、人々が住み暮すには都合のよい場所だった。

東のメキシコユカタン半島のマヤにもピラミッドが多いがこれと対をなす文明南米ペルーのインカにはこれという注目に値するピラミッドはない。ここはユカタン半島とは違って太平洋岸であり経度も一〇度以上離れているからユカタン半島の背骨とはならない。実際にはインカの首都クスコはユカタン半島よりも東にあるが地球風水図では西に位置するようになってくる。インカの栄えたペルーのアンドス高原はユカタン半島のマヤよりは遙かに早く文明が開けた。ギザとチャタルフユックの関係に似ている。但しチャタルフユックはギザよりも更に北に位置するがユカタン半島とアンデス高原は赤道直下のアトランティスであるスラウエシからすれば丁度対称的に北緯二〇度と南緯一五度にある。チリの南緯二〇度付近からもアンデス高原よりも古いアンデス文明系の遺跡が発掘されていてBC六千年紀にもなるらしい。となるとスラウエシ・アトランティスから

すればユカタン半島とアンデス高原及びその南部は全く対称の位置にあつてかたや龍頭、片や龍の腹にも当たっている。腹は六腑のある所であるから食物消化即ち文明的には活発な経済活動によってユカタンを支えていた可能性がある。同様のことがスラウエシ・アトランティスを中心として見た場合北緯三〇度のギザと対称をなすのは南緯三〇度の大西洋東岸南アフリカのケープタウン北部である。将来この辺から目を見張る古代遺跡が発掘されるかもしれない。こうして地球風水図を眺めると大西洋を挟むカルナックと南イングリッドは外龍脈上にあり壮大な巨石文明を誇りアトランティスの外郭城壁の役割を果たしているがこれに對称的な位置に北米のアリゾナ砂漠が当る。これもインディアンの巨石遺跡の豊庫であるのは偶然といえまい。

## 東洋医学の図式と地球

風水は氣の流れ水の流れが重要であつて流れがとどこつてしまえば氣も水も腐つてしまうからこれほど凶々しいことはない。八首は入首ともいって龍が穴に首を突っ込もうとしている様を写しているがまずは龍の首にあたりU字型山脈の中心から平野に向かつて飛び出してくる突端の小丘であり地のエネルギー即ち地氣が凝縮してくる場所。龍腦は龍の額であり人間の場合額には心眼があるとされているのと同様、龍の心眼をあらわすからこの場合は天象の意味を判断する中枢である。氣と水は常時流れ続けていなければならぬが流れ去つて空（から）になつてはもともともない。一時は池にためそれを流す必要があり案山はその流れをとめる役割をする小丘

であり朝山は更にその外の大流をとめる高山である。風水図を見ればわかるが女性の性器を写しとっているのは間違いない。全体とし

て円形でもあり地球を示しているともいえる。地球風水図では穴即ち中心にあたる場所はスラウエシとなるが祖宗山、八首、龍腦、案

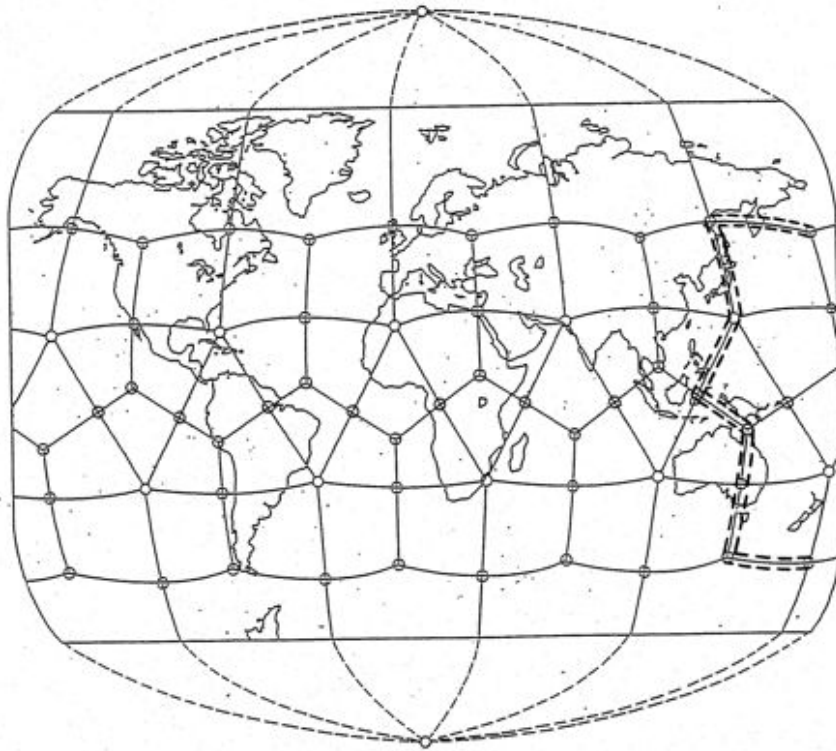


図5-4 地球風水の中枢軸

山、朝山は地球結晶図の稜線上に位置する島や列島になる。地球風水における中枢は北極を取り囲みアリューシャン列島に沿う稜線が東から西にユーラシア大陸にあたって直角に折曲り日本列島を経由する稜線として南下する。それが小笠原諸島辺で西南に折れスラウエシに達する。スラウエシ以南は東南に折れオーストラリアの東北端にあたり大陸を縦断南下し大平洋に出て九〇度折曲り東に走る。この東走する稜線は南極大陸を取り囲む。単純化すれば地球風水の中枢はスラウエシを中心に南北に□型に展開している(図5-4)。

大きくはこの中枢線に沿って大平洋の海流が動いている。北の日本沿岸では黒潮、南のオーストラリア東岸ではオーストラリア海流となっている。フィリピン、スラウエシ、ニューギニアなどのメラネシアはこれら大海流の西端に位置している。大西洋にも大海流はあるがここには大平洋とは違い大小様々の無数の島々があるわけではない。どちらかというところ「死の大平洋」である。「地球人体」にとつては大平洋が大西洋よりもはるかに重要な理由はここにある。地球風水の中枢であるアリューシャン列島、日本、スラウエシ、オーストラリア東部、南極大陸北岸は地球を人体に見立てた時にはチャクラの各部位に相当する。簡単にいうと人体の中枢、人間心身の健康をコントロールする中枢である。漢方医学では人体を表と裏にかけている。正面が裏で背面が表である。そうなる私の作った地球人体図は裏ということになる。漢方医学とインドの瞑想術とはよく似ており経絡はナディであるがインドの人体図は瞑想を常態としてみるのか座像が多い。奈良の大仏もそういう座像だった。瞑想人体図で有名なチャクラ図は尾底から頭の頂上まで脊椎に沿って七つの幾何学形をチャクラの象徴図として描く(図5-5)。この図を見ているとインドも含めた東洋では人体を極めて図式的にとらえてい

たことがわかる。インダス人は明かなアトランティス遺民であるから彼等の人体図はアトランティス人の人体観を示しているとみている。地球人体図と地球結晶図を重ねるとおのずと地球人体図式が描き出せる。漢方医学がアトランティス科学の結晶だったとみなすのはいうまでもない。ということからなるべく忠実に漢方の人体図を地球人体図に写し変えるとうなるか。五臓六腑と経絡の関係が表に出てくるがこれをもとに単純に写し変えられていたとはとうてい思えない。というのも地球の五臓六腑をイメージできないからである。五臓六腑は人体の内部にあるように地球の場合も内部にあるはずであるが地球の病気が地球内部の変調としたらこれは大ごとである。人間にわかる地球上の病いとしてはやはり天変地異である。地震や雷、洪水、暴風、噴火などならばつきり地球が変調をきたしている人間には感じられる。これならば病いである。そこで五臓

六腑と経絡の関係表のうち右端の五行欄に着目してみるといい。五行ならば東西南北の方向と関係があるから地球上の各地域にどう振り当てられていたか想像しやすい。水が北、木が東、火が南、金が西で土は中心である。これは温帯の中国だからであり水は冷く冬で北木は緑もえる春で東、火は熱暑の夏で南、金は金色となる葉の秋で西ということである。しかし赤道直下のスラウエシではどうか。北と南が冷く、東西を表わす春秋に

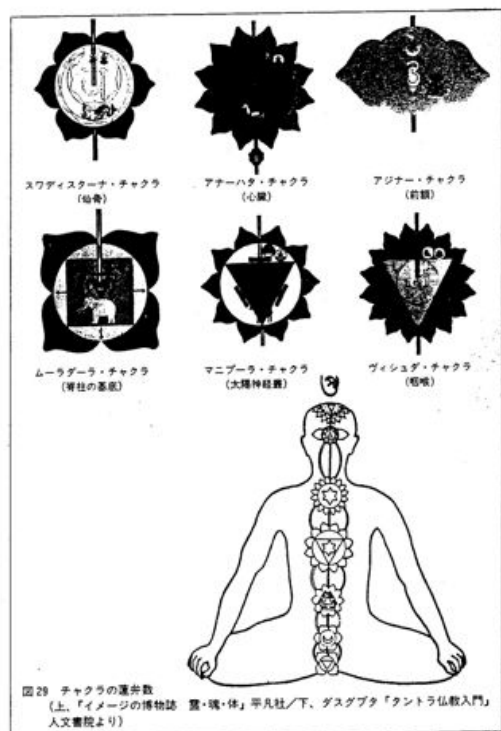


図29 チャクラの蓮弁数  
(上、「イメージの博物誌 霊・魂・体」平凡社/下、ダスグプタ「タントラ仏教入門」人文書院より)

159 第四章 プラトンの世界

図5-5 チャクラの蓮弁数

それほど大きな印象の差はないであろう。インドの脊椎に沿うチャクラを人体地球になぞってみるとほぼ同じ経度上の南北関係に当るのである。人体風水図を借りるなら南極、オーストラリア、スラウエシ、日本、アリューシャン列島、北極となる。どうも日本が重要な位置にあたりそうである。稠密な夢通信網の存在などから地球人体の中では温帯の日本がスラウエシのアトランティスに代って中枢をなしていたらしい。この日本か

ら地球をながめたら中国の場合と変らなかったであろう。五行の方向も中国と同様でありアトランティス中心の人体図にもそれが適用されたはずである。地球の裏と表は、スラウエシ、アトランティスのある太平洋が裏、大西洋が表である。地球上の一〇個の正五角形は図のとおり五行に対応していたであろう(図5-6)。但し裏は太平洋を中心として北の三面と南の二面、表は大西洋を中心として北の二面と南の三面である。心臓や肺などの循環器である五臓の治療に役立つ経絡は裏、胃や腸などの消化器である六腑に役立つ経絡が表にある。更につばは手と足に集って手に関るものは六腑のうちでは大腸、小腸、五臓では心臓、肺である。地球人体図を見るまでもなく手は北半球足は南半球の領域であるから大腸、小腸、心臓、肺に関する経絡は北半球であり、南半球は六腑のうちの胃、膀胱、胆と五臓のうちの脾、肝、腎に関わる経絡がある。経絡は夢通信網、

経穴（つぼ）が交点であるのはい  
うまでもない。こうしてできあが  
ったのは地球経絡図である。五臓

六腑が五行のどれに当たっているか  
は表（図5-2）を見てもらいた  
い。地球人体にあつては五行の方

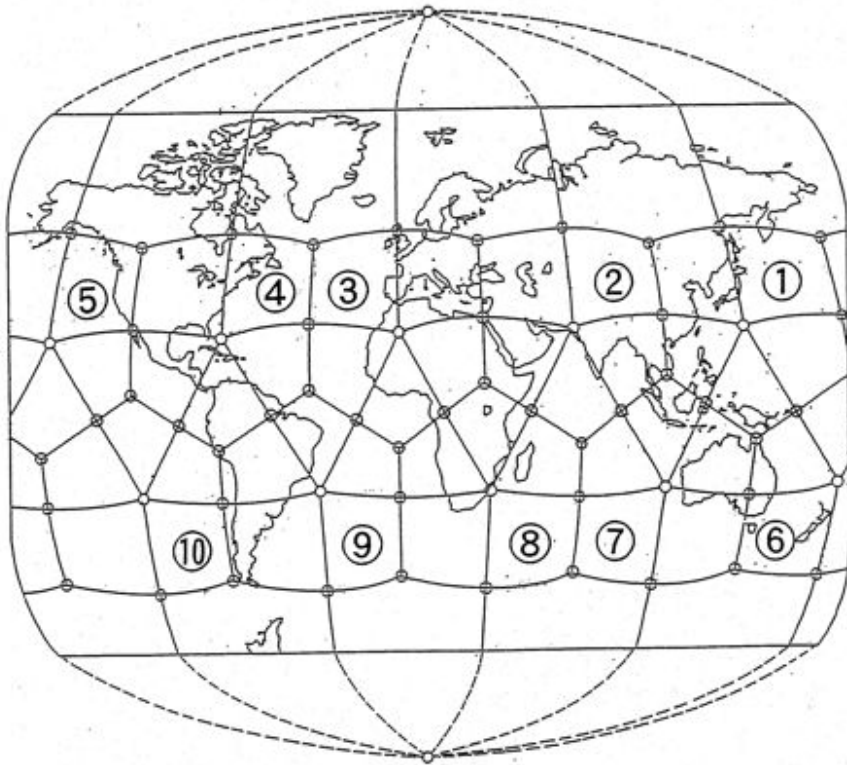


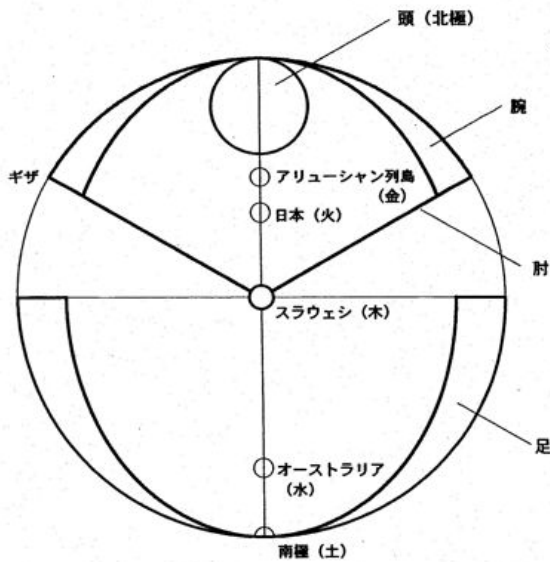
図5-6 地球の五臓六腑経路部位置図

向に注意を払ってなるべく無理な  
く地球一二面体に嵌め込んだが火  
（南）と水（北）は南北逆転して  
いたであろう。というのも表では  
手（北半球）の関わる五臓六腑に  
水がなく逆に足（南半球）に関わ  
るものに火がなかったからである。  
いずれにしてもこの地球人体はス  
ラウエシ・アトランティスを中心  
に構成されているが赤道直下のス

を意味し余り変りはない。火と水  
が逆転しても問題にはならない。  
しかし赤道直下でも太陽が東から  
上がり西に沈むのは北半球の中国  
と少しも変わらないから木が東、金  
は西となろう。  
次にインド瞑想人体図のチャク  
ラに着目したい。チャクラは前述  
とおりに尾底から頭まで七つである。  
これを地球人体図に写すと南極は

ラウエシからすれば北も南も寒冷

脊椎の基底で土を、オーストラリ



地球人体図（座像）

図5-7 地球人体図（坐像）



アは仙骨で水を、スラウエシが太陽神経叢で木を、日本が心臓で火を、アリュウーシヤン列島がのどで金を象徴する(図5-7)。その理由にはチャクラの花弁数とプラトン立体の相関性があるが詳しくは説明しない。これは『発光するアトランティス』で考察したことである。但しプラトンは正一二面体を神の立体としているが五行には神はないから金に、正八面体は風であるがこれも五行になく木に置き変えている。この置き変えも決していいかげんにやっているわけではない。チャクラは全身の感官や五臓六腑の健康をコントロールするから地球人体の南極からアリュウーシヤン列島に至る五つのチャクラは五行に忠じて地球上の一〇の地域をコントロールする役割を果たす。たとえば火のチャクラである日本は心臓(火)に関わる東アジアと小腸(火)に関わるヨーロッパ、北アフリカをコントロールするのである。スラウエシであるアトランティスはこの図によれば五

行木の性質のある胆の南アフリカと肝の東北太平洋をコントロールすることになる。太陽神経叢というチャクラは身体を中心、ヘソに位置していて全身をコントロールするからアトランティスも全世界をコントロールしていたはずである(図5-6、5-7)。この想定が正確であるのは第七章「魔女と神話」で検証されている。

中国の漢方医学、インドの瞑想術と違う体系の身体図式を果たして都合よく合体して一体系として考えられていたであろうか疑問に思われるむきもあろう。しかし漢方も瞑想もアトランティス科学が起源である。アトランティスが海没した後遺民が世界の方々に散り住みついた所でそれぞれの事情に合わせて部分部分を断片的に維持伝承したということであり、本来は漢方も瞑想も一つの総合的な体系に組み込まれたものであった。

## 五臓六腑の治療と地球の治癒

大地は、——とツアラトウストラは言った——

皮膚を持つている。

そしてこの皮膚はさまざまな病気におかされている。

たとえば病気のひとつが「人間」なのだ。

(ニーチェ『ツアラトウストラはかく語りき』)

哲学者ニーチェは一九世紀後半の人であるが彼が自分の身代りに登場させたツアラトウストラは古代ギリシアよりも更に古いペルシアの聖者ゾロアスターのことである。ニーチェはゾロアスターに託

して自分の思想を語ったのが有名な『ツアラトウストラはかく語りき』であるがこれを読んでいるとニーチェは古代的感性に優れていたことがよくわかる。特にこの引用の箇所は本書の主題をそのまま表明していると言っている。大地(地球)は皮膚を持つていてそれが病んでいると言う。これは間違いない古代人の知見をニーチェが代弁している。病気のひとつが「人間」であると言うのも一二章で扱うことと全く一致している。又ニーチェは大地(地球)には心臓があり黄金でできているとも言っているが地球の内部に内臓を見立てることは古代の人々もしたとは思わがはつきりしたイメージを抱いていたとは思えない。地球の内部は見えないから漢方医学のように皮膚の直ぐ内側を走る経絡とその始点経穴を通して内臓を把握していたであろう。たとえば古代インカ文明が発生した⑨の面は胃であるが五行の土に対応しているからこの面の経穴、経絡は土に関する地

球の病を治療するためのものであったことになる。土に関する天災と言えば地震である。大地が鳴り大波さながらにうねる地震の恐れのある時にはこの⑨の面に針を刺し灸を据えてそれを未然に防いだであろう(図5—6)。とはいっても⑨の正五角形内の稜線上か頂点(交点)上である。更にこの⑨の内部に災害(病気)があつた場合、これと直結する地球風水の中枢上で同じ土を担う南極大陸のうち極地からなるべく遠く(出来るだけ北)かつ稜線上にピラミッドかストーンサークルをつくり治療する必要があつた。作業は真夏に限られたであろう。即ちピラミッドを造りストーンヘンジなど巨大環状列石を組んだ。又世界の何処かに大地震が起きた時にもこの面の経穴には同じことが行われ地球は浄化されたはずである。それではそのことを証明する事実があるか。実は無数にそれはある。エジプトでもメソポタミアでも中国インドでも同じであるがこれらの古代文

明地では各地方や都市に固有の神がいて、世界に大災害が起りそうになると各地の神々が一同に会してその災害をどうして避けるか相談する神話が何処にでもある。エジプトやメソポタミアはインドや中国とは違い広大ではないがこの四大文明も大河沿いに発生し発展したのであるから始めは四大文明地ともにそれほどは広くはなかつた。しかしその人々は自分達の住む場所とそれを包む文明圏を「世界」と考えた。各文明の神々は「世界」の各地を代表する神々である。かつてアトランティス文明時代は全世界の神々、特に世界を包む正一二面体と正二〇面体とでできる結晶の頂点のうち特に陸地にある二二点の神々が相互に通信し合つて大災害を未然に防いだり、大災害の後の地球浄化を計つたのである。これがアトランティス時代の神々の会議であつた。神とはエジプトのファラオのように生きた神であり王である。偉大な呪術者又はシャーマンであるのは

言うまでもない。即ち夢通信時代にあつては各地の最高の夢見者であり夢通信能力者である。日本の八百万の神も夢通信ネットワークの交点にいた夢通信者のことであつた。

## その他の身体部分

中世北欧の人々は岩を大地(地球)の骨に見立てているがこれを全地球規模に当てはめたらヒマラヤ山脈やロッキーマウンテン山脈、日本海溝や天皇海山脈といった海溝や海底山脈と考えていい。地球に内接する正一二面体、正二〇面体の結晶の稜線を辿ってみるとほぼこれらの山脈や海溝、海底山脈と重なっている。そうしてみると地球の骨格は地球結晶の稜線であると言つていい。頂点は関節

である。河川は古代の人々が見立てたとおり血管である。地球の外殻は人体で言うなら皮膚であるが、陸は通常の皮膚、海は唇などの粘膜と考えていい。海が唇などの粘膜であるとするといースター島のモアイや南太平洋の孤島ボナペやコスラエ島の巨石遺跡は唇や性器などの粘膜上の点に相当しここを刺激すれば性感を興奮させる。地球にとって性感の興奮は地球内部のマグマの激動であるとすれば火山活動をコントロールする装置としていースター島のモアイや、ボナペやコスラエの巨石建造物は築かれ機能していたに違いない。天災の中で人間の生活に特に激しい被害をもたらすものは洪水、地震、噴火、雷、台風、冷害、旱魃であるがこれを五行に当てはめると洪水Ⅱ水、地震Ⅱ土、噴火Ⅱ火、雷Ⅱ金、台風Ⅱ木、冷害、旱魃も木である。この原因として考えられるものとして太陽黒点の急激な変化、巨大隕石の落下、小惑星と地球の衝突、地軸の変調、地磁気



の乱れなどがあげられるが人間の想像を遙かに越えた天然、宇宙現象が大災害を引き起こす恐れが常にある。実際にはそれが何千年間に一度くらいの確率でしか起きないとしても人類滅亡の危機にさらされたことは何度、いや何十度、ひよっとしたら何百度とあったかもしれない。その危機をきりぬけるために地球療法が考案されたはずである。しかし洪水や地震などの天災は毎年、世界の何処かで起きている。これに対処するために夢通信ネットワークが全世界隈無く張り巡らされたがそれを実行したのは間違いなく人間達である。それでは地球にとつての人間とはどんな存在なのであろう。ニーチェは人間は（大地）の病氣の一つと言ったが果たしてそうであらうか。

## 夢通信と地球医療の痕

### 跡

太陽のネットワークによる夢通信と地球医療の痕跡は世界の至る所の神話や伝説などにふんだんに見られる。ニーチェがツアラトウストラと呼んだ古代ペルシアの聖人ゾロアスターは紀元前一〇〇〇年以上の時代に実在した人であり、この人が世界で初めて呪術でない、人間の精神的幸福を説いた宗教ゾロアスター教の教祖である。彼は光の神アフラ・マズダーの啓示を受けてゾロアスター教を創り出す。ゾロアスター教で善神アフラ・マズダーは光の神、悪神アンラ・マンユは闇の神であり大魔王でもある。光の神アフラ・マズダーは闇の神アンラ・マンユと戦い勝利して世界に光明をもたらす。ゾロアスター教ではこの光と闇、善と悪の壮絶な戦いを人間の内面での善

悪の戦いになぞらえているからこそ高度宗教と評価されるが、ゾロアスターはこの光と闇の神は自分が造った神ではなく世の始めから存在して自分で語りかけてきたのであってその内容を自分自身は人々に語っているに過ぎないと言っている。旧約聖書のモーゼがヤハウエの、イスラム教のマホメットがアッラーの言葉を聞く、啓示と同じ事である。但しゾロアスターは闇の神アンラ・マンユの言葉も光の神アフラ・マズダーの言葉と同様に聞いているのがモーゼやマホメットと大きく違う。モーゼやマホメットにとつて唯一絶対の神ヤハウエやアッラーの光明だけの世界を見ているがゾロアスターは光と闇を同時に見ている。

太陽のネットワークによる夢通信の光景はこうであった。ネットワークの交点は山や丘の頂が多いが闇を突き破って光が山の頂から別の山の頂へと瞬く間に走り抜けていくと世界は又闇の中に没して行く。この一瞬の光の出現の時に山の頂の巨石の傍らに横たわっていたシャーマンが体を起こし夢を光に乗せ遙か彼方のシャーマンに送る。この光景を宗教的な出来事として伝えたのがゾロアスター教であらう。古代ペルシアは現在のイランを中心とし、イラク全土さらにはトルコの一部も含む巨大帝国であったが現代ではイラク全土とトルコの東部にあったチグリス、ユーフラテス河沿の文明メソポタミヤの流れを汲んでいた。ゾロアスターの神々の中にはメソポタミヤの神々によく似たものが見かけられる。メソポタミヤの神では嵐の女神エンリルが特によく知られているが、嵐だけでなく、地震や噴火の神も含め天災や天候を象徴する神々が多い。と言うよりも神々の殆どはそんな天候神、天災神である。太陽のネットワークの痕跡を示すゾロアスター教の光と闇の神に更に天候や天災の神々が重なっていたのがイラン、イラクの古代の世界だった。天候や天災の神々をまつり慰めたのがメソポ

タミヤの宗教であったからこれは地球医療の痕跡でなくて何であろう。更にメソポタミヤ文明と非常に似た特徴を示す古代中国では聖なる皇帝が山東半島背後の聖山、泰山に登り天をまつる封を行い更にはその北の山、梁父山の山頂で地を鎮める禪を行った。これは神話の時代から続いている。このまつりと鎮めを封禪と呼び中国の各王朝の皇帝はこれを行わなければ国はよく治められないと信じられていた。最も有名なのは紀元前一世紀の漢の武帝が行ったものである。中国の皇帝は泰山に登り天下の名山大川をまつった。特に東西南北の四つの山と中心の山を五岳と呼び重要視した。又冬至の日に天をまつり夏至の日には地をまつるのが礼であったと漢の武帝の時代の歴史家司馬遷が□史記□で伝えている。五岳は夢通信の菱形ネットワークの四つの頂点(交点)の山であり中心の山は菱形の中心であろう。しかも冬至と夏至が重要であったというから太陽のネッ

トワークも夏至と冬至の日の出、日没方向に張り巡らされていることと一致するではないか。勿論夢通信も冬至と夏至の日の通信が一年のうちで最も重要であったのは言うまでもない。又皇帝が泰山に登って名山大川をまつったのも地球医療を行ったことを示しているに違いない。

## 第五章 了